

「父さんは大きいけれど／アフリカの／象や麒麟の方が大きい」 貴田 雄介（熊本県）
2行目の「アフリカ」が素晴らしいですね。ここで視界の枠が一気に取り払われます。家庭から世界へはこんなにも近くつながるものなのだと思います。

「膝立ちし車窓眺める男の子／見れば顔なき影として俺」 詩央えみる（大阪府）

「影として俺」の発見に一票。「男の子」へのまなざしはとてもあたたかいけれど、一方で直視できないくらいのはずかしさのようなものも感じさせます。それはかつての「俺」のすがたでもあるからかもしれません。

「風邪の日の壁が迫ってくるような」 ムクロジ（群馬県）

共感を覚えました。ただ、現状は比喻をつかった状況説明ですので、作品化にはもう一つ何かが必要ですね。結論でなく、あと何か一つ、わずかでも、気配だけでも、入れられるとよいと思います。

「びっくりした／自分の中に／自分しかいなかった／ファンヒーターの音さえ」り。（兵庫県）

この驚きのぶんだけ、あたたかな時間を過ごしている、ということかもしれません。孤独というものは普段はその姿を隠しているものでしょう。そうでなければこまる、という気もします。

「塩と嘘かがやく夜半に蓄音機／百合のかたちの口をかがけて」 早瀬はづき（大阪府）
とても魅惑的な作品。蓄音機と百合のかたちを重ね、聴くこと（耳）と話すこと（口）の生々しい循環から人間が浮かび上がります。

「新品の／白いスニーカー／イスタンプールで履くかも知れぬ」 帆立（愛媛県）
スニーカーからイスタンプールへ。言葉の唐突さが詩を詩たらしめているものでしょう。遠く離れたもののあいだに詩は生まれるのかもしれない。

「しらじらと泥土に眠る葱の純潔」 鶯浦 るか（富山県）

唸る。唸る。ひたすらに唸らされた一作。現代においても「純潔」という言葉はこんなに鮮やかに響くものなのですね。葱のとうもない白さに心打たれます。

「痛い痛い飛んでいかない。／痛い痛い飛んでいかない。」 四方山駄作（岡山県）
わ！ふしぎ。飛んでいきません。痛いままです。冗談ではなく、ほんとうに、ここに何かが残まっている、と感じられます。この透明な停滞する何か、を大事にすることが詩の第一歩かもしれません。

「葡萄齧ればよみがえる情けなさ」 青木菓子（兵庫県）

そのとおり、と共感するものの、なぜ葡萄を齧るとそうなるのかが、わかりません。自分の感情のうごきを観察して、検証してみました。ことわっておきますが、わからない、ということとはとてもよいことなのです。

「教習所小さな信号覗く富士」 煌月 紅華（東京都）

このようなひとりの小さなコマこそ尊いものだと感じられます。富士が覗くとき、詩も覗いている。何気ないことだけれど、作為ではつかめないものが、つかまれています。

「真夜中に／周波数合わせ／聴く声が／解放区へと／私を導く」 今泉 智子（東京都）

「周波数」を「合わせる」というのは「私」を合わせることもあるのですね。ラジオとはこちらから歩み寄るものなのだ、という新たな発見がもたらされました。

「俺にくれよ、／おまえの砂時計／／有限の生／無為に費やすくらいなら」 出水 聖（北海道）

「くれよ」の強い響きが効いています。捨てようと思っていたものでも、そういわれたら、捨てないかもしれません。自分とは異なる他者の価値観が「わたし」に介入することで「わたし」の意識は変わる。極限的な場所に届く言葉になりうると思いました。

次回も力作をお待ちしています。